宇陀を駆けた人々 5

―松浦武四郎篇2―

北海道の誕生

天保14年（１８４３）、武四郎は、ロシアが勢力を広げるために蝦夷地（えぞち）を狙っていることを知りました。日本の危機を感じた武四郎は、ロシアの南下政策によって緊張が高まっていた蝦夷地を自らが調べ、その様子を多くの人に伝えようと決意し、弘化２年（１８４５）から安政５年（１８５８）まで６回にわたって調査を重ねました。危機からどのように日本を守るべきかを考え、そのためには、どこまでが日本で、その国境に近いところがどのようなところであるかを明らかにしなければならないという思いからの行動でした。

武四郎は、蝦夷地の詳しい地図を作製したほか、アイヌ民族の文化を紹介することにも努めました。また武四郎は、蝦夷地の調査を通じてアイヌ文化に触れ、アイヌの人々を尊重することも訴えています。

時代は江戸から明治へと変わり、武四郎は、蝦夷地に詳しい第一人者として明治政府の一員に迎えられました。武四郎は、明治２年（１８６９）７月には、蝦夷地に代わる新しい名称の提案を明治政府に行っています。その候補にあがったのが「北加伊道」「日高見道」「海北道」「海島道」「東北道」「千島道」でした。最終的に「北加伊道」の「加伊」が「海」となって、「北海道」と命名されました。アイヌ民族を示す古い言葉「カイ」を使って「北のアイヌ民族が暮らす大地」という思いを込めた「北加伊道」から「北海道」の名前が誕生しました。また、武四郎はアイヌ語の地名に基づき、国名（後の支庁、現在の総合振興局と振興局）や郡名の選定にも関わりました。しかし、明治政府の北海道開拓政策は、アイヌの人々に対しては厳しく、この政策を巡って反発した武四郎は、辞職し政府を去りました。

晩年は、趣味の古物収集のほか、東海、近畿、四国、山陽、九州などを巡り、大峯奥駈修行や大台ケ原探査、富士山登頂などを行うなど、旅や探査への情熱は衰えることはありませんでした。探検家の武四郎、宇陀の街道も歩きました。

文・柳澤一宏（文化財課）

人権コーナー

当たり前な毎日

6月18日に大阪府北部を震源地とする地震が発生し、また7月上旬には、記録的な大雨となり、西日本を中心に多くの地域で河川の氾濫や浸水害、土砂災害が発生しました。これらの災害で暮らしに大きな影響が生じ、なかには、犠牲になった方もおられます。

一方、今年は終戦から73年が経過しました。戦争を経験した人の数は、日本の人口1億2千6百万人の内、2千5百万人、およそ全人口の20％です。そんな戦争を経験した人も高齢化していき、戦争の悲惨さ、残酷さ、恐ろしさを直接知っている人も年々減ってきています。

そんな中、私たちは毎日、「当たり前」と思う平凡な暮らしを営んでいると思います。住むところがあり、ご飯を食べ、お風呂に入り、布団で眠る。そんな「当たり前」な生活は簡単に手に入るように思いがちですが、必ずしもそうではありません。病気や事故、天災などで、そんな「当たり前」な生活はあっという間に崩れてしまいます。そんなもろい上に「当たり前」の生活は成り立っています。

私たちは普段、そのようなことをあまり考えずに暮らしていると思います。でも、何か起こった時、あるいは、自分の身に降りかかった時、初めて「当たり前」に過ごせるということに幸せに感じ、そして、真剣に考えると思います。毎日を無事に過ごせるということは、本当は一番難しく、また一番ありがたいことではないでしょうか？

毎日生きていれば、色々なことがあります。嬉しいこと、楽しいこと、辛いこと、悲しいこと、悔しいこと…。それが、どんな日であったとしても、今日を無事に過ごせたことに感謝しませんか？

いつまでも同じ生活が続くように思いがちですが、決してそうではありません。日々無事に過ごせることに幸せを感じながら、毎日を大切に過ごしませんか？また、私たちの今の平和な暮らしは、戦争で犠牲になった人たちの上に成り立っているということを決して忘れずに、かれらに思いをはせながら、平和に暮らせることのありがたさを感じてみませんか？